

オヤシロさまの花嫁

村の厄介者だった私が神様に溺愛
されてしまうお話

【登場人物】

・琴音

父親との歪んだ関係から心を閉ざし、感情を失っている。
オヤシロさまの花嫁に選ばれ、儀式に参加する。

・綾（アヤノヒコ）

「オヤシロさま」として村が祀っている山神。
村人からは崇められる一方、恐れられてもいる。
村人達の信仰心を疑っており、人間の生贄を捧げられることをよく思っていない。
尊大な性格だが、面倒見が良く、本来は優しい人物。

・アシオ（アシオノミコト）

オヤシロさまとは昔からの仲。
高位の神だが、気やすい性格。

第一章 3頁

第二章 81頁

第三章 134頁

第四章 184頁

第一章

「琴音、オヤシロさまの花嫁はお前に決まったぞ」

お父様が淡々と告げる。私は声も出なかった。

「良かったな。これで我が家の格が上がるというものだ」

——オヤシロさま。村が祀る山神。

オヤシロさまの花嫁になることは村の人間にとって大変名誉なことだった。

五十年に一度選ばれる花嫁はオヤシロさまに捧げられ、選ばれた娘は名誉な死を

遂げる……と言われていた。

オヤシロさまの花嫁。別名、オヤシロさまの生贄。

お父様は喜んでゐる。私は……どちらでもなかった。どちらかといえど安心して

いた。

「だが……、もうすぐお前と別れなければならぬのは寂しいな」

そう言いながらお父様は私の着物をはだけさせ、胸の中に手を入れた。私はじつとしながらその行為が終わるのを待つ。

我が家は村の中では裕福な家だった。庄屋のお父様。お母様は何年も前に亡くなり、弟はまだ幼い。私は養つてくれるお父様に感謝しなければならない。

「ああ……。可愛いぞ……。もつと見せてくれ」

お父様は裸になった私の胸をぺろぺろと舐める。私はじつとそれを見つめた。

—— オヤシロさまの花嫁になれば、お父様から解放される。

お父様からこんな扱いを受けるようになったのはお母様が亡くなってからのことだ。

美しくて気立ての良いお母様は村で評判の美人で、私はお母様によく似ていると言われていた。

けれどもお母様は流行病で亡くなってしまった。それから、お父様がおかしくなつた。こうやって日に何度か私の体を触ったり舐めたり、口付けをしたりしてくる。

とても怖くて、何度か嫌がるとお父様は嫉だと言つて私の体を縄で縛つてお尻をきつく叩いた。

私がいけない子だから、お父様は私を叱る。私が大人しくしていれば、お父様は怒らない。優しいお父様でいてくれる。

それから、私はお父様が体に触るときは、黙っているようにした。

今年で十七歳になった私は、お父様の仕事を手伝いながら家事をして、畑仕事に勤しんだ。オヤシロさまの花嫁の話は、そんな中での出来事だった。



花嫁を捧げる宴は満月の夜に行われる。

花嫁は身を綺麗に清めたあと、真っ白な死装束を着て、村の広場に向かい 御神輿に乗せられて山の中にある洞窟の入り口まで向かう。そこで村人達と別れを告げ、一人で洞窟の中に入るのだそうだ。

花嫁がそのあとどうなるかは、誰も知らない。ただ、「オヤシロさまが連れて行く」とだけ聞いていた。

私が花嫁に決まると、今まで声をかけてこなかった人たちまで声をかけて来るようになった。誰も彼も、名誉な花嫁に選ばれた私を褒めたたえる。

「琴音は美人だから、オヤシロさまもお喜びになるだろう」

村人達は嬉しそうに私に告げる。

大人はそんな調子で喜んでいてくれるけれど、子供達は素直だ。オヤシロさまを怖がって泣いている。

「ねえ！ はなよめはオヤシロさまに食べられちゃうの!？」

まだ小さな子供が母親に尋ねていた。母親は答えかねていたけど、多分子供の言う通りなんだと思う。

花嫁なんて言われているけれど、実際は生贄と同じだ。今まで捧げられた花嫁達は誰一人として帰ってこなかった。オヤシロさまに食べられたかどうかは不明だけど、生きてはいないだろう。

本当はみんなオヤシロさまを怖がっている。だから供物を欠かさないし、五十年に一度最大の供物として村から人を差し出していた。

みんな嫌なんだ。オヤシロさまの花嫁になって、食べられるのが。私が一番都合がいい人間だっただけ……。

こんな状況だというのに、私はなんの感情も湧かない。むしろ早くこの村を離れて、死にたかった。

村人達は喜んでいるように見えるけれど実際は違う。無口で感情を表さない私を
気味悪がっていたし、厄介払いができたと思っただけだ。

私がいなくなつても、誰も困らない。家は弟が継ぐだろうし、お父様は悲しむか
もしれないけど……それはきつと、親としての感情じゃない。

花嫁に選ばれたのは天命かもしれない。神様が早く死ねと言っているんだ。それ
ならそれでよかつた。ここに残つても意味などない。望むこともない。

儀式の夜、私は打ち合わせ通り身を清めて装束を身に付けたあと、村の広場に
向かつた。

村人達はオヤシロさまを満足させるために、たくさんの食べ物を集めている。花
嫁の私と供物。

——人間も野菜も、みんな同じ……なのね。

村での儀式は滞りなく済み、私は神輿に乗せられた。神輿をかつげるのは村の衆の中でも、既婚者だけと決まっている。その中にはお父様の姿もあった。

神輿には暖簾があつて、外は見えない。オヤシロさまの洞窟の場所を知っているのは村長や家長のみ。私は四人の男に担がれて夜の山を登った。

———ここが、オヤシロさまの洞窟。

山を登つてどれぐらい経つたのか。あたりはまだ真つ暗。夜の山は恐ろしいほど暗く、来た道も、これから入る洞窟の中も何も見えない。

「さあ、オヤシロさまの元へ行くんだ」

私はその声に従い、暗い洞窟の中にゆつくりと足を踏み入れた。

何も見えない。洞窟のなかは足元がゴツゴツしていて、歩きづらい。既に後ろは何も見えなかった。村から来た男達の姿も。

ぴちゅん、と水滴が落ちる音がした。獣がいるのか、小さな物音も聞こえる。

「——お前が花嫁か？」

やがて、ふと声が聞こえた。おどろおどろしい声。この世のものとは思えない、大きく、低く、獣にも似ている。

これがオヤシロさまだろうか。オヤシロさまは闇の中から語りかけてくる。

「今夜の花嫁は随分貧相だ。よもや適当に村の娘を選つて寄越したのではあるまいな」

そのようなことはない。だけど恐怖からか、声は出なかった。

何かが蠢く音が聞こえる。もぞもぞと這うような音も。その音は私に近づき、毛のようなものが私の首にずるずると巻きついたので分かった。

「たかが小さな村がよくも我にそのような尊大な態度を取れるものだ。答えてみよ、娘。村の者は我を蔑んでおろう」

そうです。村の人たちはあなたを怖がっています。そんなことを言ったらオヤシロさまはどうするだろう。この首を絞めるものを強めて私の喉を潰すだろうか。それとも村を消してしまおうだろうか。

どちらも、どっちでもいい。どちらにしろ私はオヤシロさまの生贄に相應しくない。既にお父様に汚されてしまったのだから。

「……ん？ お前は——あの時の……？」

不意に、私の首を絞めるものが緩まる。なぜだろう。いいえ……何も考えない方がいい。私はただオヤシロさまが手を下すのを待てばいい。

「……オヤシロさま、どうぞ私を早く、喰らってください」

「なんだと？」

「私は生贄でございます。こうして来たからには……覚悟は出来ております」

私は丁寧に指をついて頭を下げた。オヤシロさまの顔は暗闇の中では見えない。声ができる方に向かってそう言うと、驚いたような声が聞こえた。

「そうか……殊勝なことだ。今までの娘どもは逃げ惑い無様に叫ぶ者ばかりだったが……」

これで……ようやく終わる。私はそつと目を閉じた。

「ついでまいれ」

洞窟の奥の方向にずるずると這う音が消えていく。

——どこかに行くの？

不思議に思いながらも、私はオヤシロさまに続いて奥に進んだ。

ここはオヤシロさまの寝ぐらだろうか。一体どこまで進むのか。やがてしばらく進むと、洞窟の奥の方に光が見えた。外に通じているのかもしれない。私はその光に向かった。

洞窟から出た瞬間、眩い光が私を包み込んだ。あまりの眩しさに目を閉じる。

「目を開けよ」

あれ……オヤシロさまの声、じゃない。先程の声とは違う、もつと涼やかな声が聞こえた。私はそつと目を開けた。

そこは山でも林でも村でもなかった。見渡す限り拓けた場所には花が咲き乱れ、空は青く澄んでいる。まるで仏様が住むような桃源郷のような場所。こんな綺麗な場所は見ることがない。

そして、私のそばには男性が立っていた。白い髪で色白の、すらつと背の高い男性だ。村でも見たことがないような美しい容姿をしている。この人は誰だろう。

「ここは私の住処だ」

「あなたは……どなたさまですか」

「村の人間達はオヤシロさまと呼んでいる」

「オヤシロさま……？」

そんな。さつきはもつと恐ろしい声をしていたのに。今のオヤシロさまは全く違う声だ。けれどオヤシロさまは山神。姿なんてなんとでもなるのかもしれない。

でも、オヤシロさまはどうして私をここへ連れて来たんだろう。私は食べられるはずなのに……それとも、ここで食べるのか。

「来い。私の御殿へ案内しよう」

オヤシロさまは花園を進んでいく。私はその後続いた。

花園の先に、ポツンと建物があった。真っ赤な柱に支えられた艶やかな御殿だ。

——こんな場所にこんな立派な御殿があるなんて……。

「戻ったぞ」

オヤシロさまが声を掛けると、入り口の扉から小さな女の子が二人出てきた。頭に二つお団子結びをこさえた女の子達は、オヤシロさまを見て嬉しそうに笑う。

「オヤシロさま！ おかえりなさいませ！」

「なさいませ！」

「花嫁を連れて帰ったぞ。世話をしてやれ」

「花嫁さま……？」

二人の女の子が私を見てポカンとする。そしてしばらくして「ええ~~~~~
っつ！」と叫び声を上げた。

「オヤシロさま！ 花嫁さまをもらわれたのですか！」

「ですか！」

「やかましいぞ。騒ぐ暇があつたら支度をしろ」

二人の女の子は私に近づくと興奮したような眼差しでじつと見つめた。

「オヤシロさまの花嫁になるのですか……？」

「ですか……？」

「はい……」

そう答えると、二人の顔がぱあつと明るくなる。

「やった！ オヤシロさまの花嫁さまだ！」

「さまだ！」

二人は飛び跳ねながら喜んでいいる。一体どうしたんだろう。

「まったく……うるさい眷属だ」

「あの……オヤシロさま。彼女達は……」

「楓と紅葉だ。二人は俺の眷属にあたる」

オヤシロさまの眷属————ということは、彼女達もオヤシロさまの一部。

「我はここで暮らしている。娘、お前もここで暮らすが良い」

「え……」

「ここ何百年……まともな花嫁が現れなんだ。我はお前を花嫁として認める。お前にはその資格がある」

どういうことだろう。私は食べられるために花嫁になったのに。やっと死ぬると思つたのに。まだ生きなければならぬのだろうか。

「……どうした？ 喜ばぬのか」

「私は……花嫁として参りました。オヤシロさまに食される覚悟はございます。どうか、私を屠ってくださいませ」

再び頭を下げる。

お父様に辱められ、花嫁という名の生贄にされ、もうこの世に未練などない。死ぬるなら本望だ。神様の贄になるのだから。

「何を言っている。我はお前を殺すつもりなどないぞ」

「え？　ですが……」

「生半可な覚悟で参つたのであれば他の花嫁のようにしたかもしれぬが、お前はそうではなかつた。他の人間と違い清い魂を持っている。我の花嫁に選ばれることは滅多とないのだぞ。もつと喜べ」

—— やつと死ぬると思つたのに……。

喜びなどない。そんなものはとうに消えた。この世は地獄だけ。それなら消えてしまったほうがいい。せつかくここまで来たのに、オヤシロさまに受け入れてもらえたというのに、喜べない。

「お前はなぜ笑わぬ。泣きもしない、笑いもしない。人間だろう」

「そのようなもの……あつても意味がないものでございます」

オヤシロさまは黙り込んだ。こんな私に呆れているのだろう。私は花嫁に相応しくない女だ。このような美しい場所においていい人間ではない。

「……我のことを覚えてはおらぬか」

「え？」

「この姿に見覚えはないか」

突然、目の前にいたオヤシロさまの姿が狐に変わった。狐の姿をじつとみていると、いつかの日のことを思い出した。

「もしかして……」

「そうだ。罨に掛かっていた我を助けただろう」

以前、山の中で罨にかかった狐を見つけて逃がしてやったことがあった。もしかしてあの狐がオヤシロさまだったのだろうか。

「その節は世話になった。あの程度の罨などどうにでも出来たが……お前が助けてくれたことには感謝している」

「……いえ、そんな」

「ここは神のみが立ち入ることのできる場所。人間は入れない。我はお前を花嫁と認めた。故にここで暮らす権利がある。そしてそうして欲しいと思つている」

「ですが……」

「異論は受け付けぬ。我は神。人間のお前が我に逆らうか？」

「……いえ。かしこまりました。そのように……」

「では、入れ。案内してやろう」

御殿の中は美しい調度品が置かれていた。村から捧げられたと思しきもの以外にも宝物がいくつも置かれている。お殿様、いや……それ以上の暮らし。

「我は普段ここで暮らしているが、いつもここに居るわけではない。ここはお前が好きに歩いて良いぞ」

「はい……」

「なんだ、おなごはこのような場所が好きなのではないのか」

「そうだと思います」

「ではもつと喜ばぬか」

私はできる限り笑おうとしてみたけど、どう笑えばいいか分からなかった。笑うなんて、いつぶりだろう。そんな気持ちはとうの昔に消してしまった。

「そうか、腹が空いているのだな。では食事に行こう」

私が黙っているのを、お腹が空いていると勘違いしたらしい。思いついたようにいうと今度は別の部屋に向かった。

そこには腰の高さほどの柱がついた板の上に、大きな腕のようなものが乗っている。いずれも装飾が施してある美しいものだ。

その上には見たことがないような色の果実らしきものがあつた。また別の椀には村でよく見る野菜が置かれている。採れたてのように新鮮なものだ。またさらに別の器には米が。板のうえに所狭しと並べられた食材を見て、私は若干驚いた。

「これは……」

「村からの貢物だ。神界にあるものは腐らぬ。故に新鮮な状態なのだ。好きなものがあれば遠慮なく食せ」

「オヤシロさまは……料理をなさるのですか……？」

「そのような面倒なことはせぬ。神はそもそも食事をせずとも良い。腹が減ることもない。気が向けば食べる程度だ」

「そうですか……」

「お前は人間だろう。料理をしたいか？」

「……できれば、そのままよりは……。ですが、オヤシロさまを煩わせたくありません。このままで結構です」

「遠慮するな。我にとつては微々たることだ。炊事場を作つてやろう。そこで料理するが良い」

オヤシロさまの身体が柔らかい光を放つ。すると、広い部屋の壁に朱の扉が現れた。

オヤシロさまはそこを開ける。

その中には見たこともないものがあつた。先程の食事を乗せていた美しい椀や薪が積まれ、鍋のようなものが置かれている。釜戸らしきものもあつた。私の家は村で比較的裕福だったけれど、ここまで立派な炊事場ではなかった。

———すごい。こんなことまでできてしまうなんて。

「ありがとうございます」

「その割に、あまり嬉しそうな顔ではないな」

「そのようなことは………ごさいません」

私があまり喜んだ態度をしないからか、オヤシロさまはがっかりしたみたいだ。

けど……正直、ここまでしてもらおう意味がわからない。私は花嫁……ううん、生贄としてここにやって来たのに。死ぬと思つていたし、期待していた。

もしかして、太らせて食べようと思つているのだろうか。それならまだ分かるけど……。

「……お前、それほど花嫁になるのが嫌なのか？」

「いいえ、そのようなことはございません。ですがここまで気にかけていただくなご身に余ることです。どうぞ私のことは気にせず……」

「そのようなわけにはいかん。お前は花嫁だ。我はお前を蔑ろにするつもりはな

い」

「……私は、オヤシロさまに食われるつもりで参りました。このように大層な扱いをされると、むしろ恐縮してしまいます」

「……元々、あの儀式はお前の村が勝手にやっていることだ。我が催促したわけではない」

「え……」

「頼みもしないのに花嫁を送ってきて、そうかと思つたら花嫁は我を恐れて失礼極まりない態度ばかり取りおる。神が花嫁を娶ることは稀だ。それに人間を差し出されたところでその娘が花嫁に相応しいかどうかも分からない」

「では……今までの花嫁は、どうなつたのですか……？」

「神を侮辱した罰で獣に墮とした。我が喰うたと思つたのか？」

「そう……聞いておりました」

「ふん、まこと勝手なものどもだ。勝手に送つて来たと思えば凶々しくあれこれ祈りおつて。神をなんだと思つておる」

「では、私は……」

「先ほども言ったであろう。我は人間など食わぬ。お前を花嫁として認めた。故にここで暮らせ。それとも、村に帰りたいか？」

あの村に——。いやだ。帰りたくない。

私は首を横に振った。殺されても構わない。でも、あの村に帰るのは嫌だ。

「ならばこれ以上の討論は無駄だ」

オヤシロさまがそう言うなら、私はそれに従わなければならない。私が何を言つたとして、何も変わらない。

「花嫁さまー！」

「さまー！」

楓と紅葉に呼ばれ、振り返る。私の背丈の半分ほどの二人を見下ろした。

「花嫁さまはねー、『しょや』のために準備しないとイケないんだよー」

「よー」

「初夜——」

それつて、もしかして……。もしかなくても、オヤシロさまとそういうことをしないといけないつてこと……。？

頭がくらくつとする。花嫁だと分かっていたけど、ずっと食べられるんだと思つていたから全く想像もしなかつた。だつて、生きて帰つてきた人はいない。村のみんなはそう思つてる。

どうしよう……。私——。

「花嫁さまー？」

「まー？」

二人が不思議そうに見上げる。

——駄目。私は花嫁になつたんだ。こんなことで逃げたらいけない。それこそ、村に罰が下されるかもしれない。

大丈夫……我慢すればいい。お父様の時みたいに、黙ってじっとしていれば終わるんだから。

私は楓と紅葉に手伝ってもらいながら準備をした。と言つても、私はあまり何もしていない。身体を清めて、白装束を着て部屋で待つだけだ。

やがて夜になった。

寢所……だと思ふ。柱と同じ綺麗な赤色の簾が部屋の四隅を囲っていた。蝋燭の明かりがゆらゆらとゆらめく。

部屋の中央には見たこともない豪華な厚い布団が敷かれている。私はその布団の横に正座してオヤシロさまが現れるのを待った。

いつになく心臓が高鳴る。気持ちを落ち着かせようとしてみたけどなかなか難しい。

「待たせたか」

寝巻きに装いを変えたオヤシロさまが現れる。私は手を前について深く頭を下げた。

「私もそれなりに役目があつてな。日中は出かけていることも多いのだ。楽にしろ」

オヤシロ様が私の横に座る。心臓がどくどくと脈打って、意識していないのに身体が硬くなる。大丈夫。我慢していれば終わる。私はじつとしていればいい。

けれど唐突に頭にお父様の顔が浮かぶ。寝静まった夜に、私の閨を訪れるお父様の顔が。

「——つう……」

「……っおい!？」

突如吐き気がして口元を抑えた。お腹が痛い。目眩がして、目の前が変な色になる。

気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い——。

オヤシロさまが驚いている声が聞こえる。こんな醜態を晒してしまつて、怒っているのだろうか。やっぱり私は花嫁には相応しくない——。

目を覚ますと、仰向けになっていた。さつきよりも気分は悪くない。

「目が覚めたか」

オヤシロさまが私の横に座っていた。もしかして私、あのまま気を失つてしまつたんだらうか。

「私……」

「倒れたのだ。気分はどうだ？」

「大丈夫です……」

「……今日はもう休め。お前も慣れない場所で疲れたのだろう。滋養のあるものを作らせるからゆつくり養生すればいい」

そう言つてオヤシロさまは部屋から出て行つてしまった。

私はさつき見た豪華な布団の中に寝かせられていた。本当は多分、オヤシロさまと使う予定だったんだろうけど……。

初夜に花嫁が体調を崩すなんて、きつとがっかりされたことだろう。

——でも、これでよかつたのかもしれない。私が生娘じゃないと知つたら、オヤシロさまはきつと……お怒りになるだろうから。



翌日、目を覚ました私は外に出た。

神様の住処は不思議な場所だった。御殿を出れば美しい花園が、空は青々と澄み渡っている。まるで時が止まったようだ。

オヤシロさまの姿が見当たらない。もしかしたら出かけているのかもしれない。一度外へ出てぐるりと御殿の裏手に廻る。そこには綺麗な池と大きな木があった。

——これ、なんの木だろう。

茂った木には桃色の実が生っている。丸い実は嗅ぐと甘い香りがした。

「花嫁さまー、何してるのー？」

「のー？」

ふと、声がして振り返ると、そこに楓と紅葉がいた。

「あ……。ごめんなさい。散歩をしていたんです」

「お散歩！ 楓も一緒にする！」

「紅葉も！」

二人は嬉しそうに飛び跳ねた。可愛らしい女の子だ。邪なところが少しもない。神様の眷属というのはみんなこうなのだろうか。

「あの……これは、なんの木ですか」

「これ？ これは桃梨だよ」

「桃梨？」

「とっても甘いのに！ 神様の好物！ お酒にして飲むんだよ！」

「だよ！」

「そう……」

不思議な植物だ。見た事もない。これはこちらの世界にしかないものなのかもしれない。

「オヤシロさまはどちらに……？」

「お仕事！ オヤシロさまはとつてもえらい神様だから、とつても忙しいの！」

「の！」

神様のことはよく分からないけど……きつと大変なんだろうな。だって村の人たちがあれだけ恐れていたんだもの……。

——それなのに、私ときたら満足に役目も果たせないなんて……。

どうすればいいか分からない。しなきゃいけないことなのに、そのことを考える
と怖い。

お父様の時だつて我慢できたんだから、オヤシロさまとだつて出来るはず、なの
に。

……怖い。あんな風に気持ち悪いのを我慢しないといけないなんて。痛くて、苦
しくて、悲しい。まるで私をモノみたいに扱われるのが。

でも私はモノだ。オヤシロさまに差し出された花嫁という品物。お父様がいなくなつたつて、きつとずつとこうやつて生きていかなきゃならない。

散歩も終わり、楓と紅葉はどこかへ行つた。私は一人時間を持て余した。

御殿の中に戻ろうか。でも、何をしたらいいか分からない。何か手伝えることがあればいいけど、神様のお手伝いなんて必要だろうか。オヤシロさまはなんでもできてしまいそうだ。

……じつとしていよう。余計なことをして怒られたくはない。御殿の入り口で座つて待つていた時だった。

「お前……こんなところで、何をしているのだ」

オヤシロさまが帰つてきた。私はうたた寝してしまつたらしい。慌てて「申し訳ございません」と謝る。

「なぜこのような場所にいる」

「オヤシロさまのお帰りを……お待ちしておりました」

「だからといってこんなところで待っているやつがあるか。中に入って休め。体調を崩したばかりだろう」

私は強制的の中に入れられた。昨日倒れたから気を遣ってくれているのだろう。申し訳ないことだ。

「出先で梅の木を見つけてな。実を取って帰ったぞ。人間はこれを食すのだから」

「あ……ありがとうございます」

また、不愉快にさせてしまう。もっと笑わないと。せつかく貴重なものをくださったのに。でもそう思えば思うほど、表情を作ることが難しかった。

オヤシロさまの深いため息が聞こえた。

「……お前は、なぜそのように無口で感情を出さぬのだ？ 人形ではあるまいに」

——人形も同然。私はお父様の弄ばれる人形。人間じゃなかった。

けど、誰にも言ったことはない。村のみんなにも。こんなこと誰にも言えない。

オヤシロさまが知つたらどう思うだろう。穢らわしい女を花嫁によこしたと村を罰するかもしれない。いや、私を八つ裂きにするか。

「それほどまでに我が嫌か……？」

「……申し訳、ごさいません……昔から、笑うのが、下手……なのです」

「畜生とて喜怒哀楽があるというのに」

きつと呆れられた。でも、どうすることもできない。こんな私が嫌ならばいつそ一思いに殺してくれたらいいのに。

「申し訳……ごさいません……」

「もうよい。それと、我は出掛けることが多々ある。あのように待っている必要はない。お前は好きに過ごせ」

—— やつぱり、呆れられてしまった。

どうして私は何もできないんだろう。怖くて……どうすればいいか分からなくて……。結局何もできない。やつぱり私は、人形も同然なんだ。



くオヤシロ様視点く

山に一番近い村から定期的に供物が届く。村の人間は我を「オヤシロさま」と呼んでいた。

このような習慣は何百年も前からあった。古来より人間は神を崇め奉る。偉大な自然を操る神への感謝を表すため、その土地で採れた作物を献上した。

そして、五十年に一度、村は人間の娘を花嫁として捧げた。猪や狐など生き物を捧げることはあるが、その中でも人間を捧げるのは最上の敬意、そして願いの証。

神々はこうした供物を捧げられた時、人間の意を汲み取り彼らの願いを聞き入れるのが通例だ。しかし、村が差し出すからと何度も受け取るものではない。

なぜこのようなことになったのか。

神への信仰心が減ったためか、近頃の人間は我を恐れるようになった。オヤシロさまなどと言っているが、彼らが我を恐れていることは知っている。

村人達は我の山を禁域とし、普段は決して足を踏み入れない。年月と共に、我は化け物のように思われていることを知った。

愚かなことだ。恐れているものに供物を捧げることは、怒りを避けるために他ならない。感謝でもなんでもない。

しかし直接罰するほどの理由ではない。我は静観した。そして、村人達の信仰心を長い間試し続けてきた。

五十年に一度、人間の娘を捧げるために山に人が足を踏み入れる。月日は巡り、またその日がやってきた。

頼みもしない花嫁に期待などしていかないが、送り込まれる以上、確認しないわけにもいかない。

——今回の花嫁はどんな娘か……どうせしようもない女を寄越したのだから。

期待はしていなかった。毎度毎度、寄越される娘は美しかったが、「オヤシロさま」を恐れて泣き叫ぶ。我の山の洞窟の中、真つ暗闇の中で恐ろしい声で囁けば、

皆気が触れたように泣き叫んで「助けて」だの「化け物」だなどと言う。まったくもって畜生にも劣る者どもだ。

どうせ今回もそのような気の小さい娘がやって来たのだろう。そう思い同じように脅かすことにした。

「——お前が花嫁か？」

暗闇の中、生贄の娘はじつとしていた。恐怖で声が出ないのか。敢えて恐ろしい声で語りかける。

「今夜の花嫁は随分貧相だ。よもや適当に村の娘を選つて寄越したのではあるまいな」

化け物だと思つているのならその通り化け物になってやろう。獣の尾を作り出し、娘の首を締め付ける。

「たかが小さな村がよくも我にそのような尊大な態度を取れるものだ。答えてみよ、娘。村の者は我を蔑んでおろう」

さあ、お前はどのように泣き喚くのか。間違っても化け物などと言おうものならその首すぐに切り落としてくれる。

だが、予想に反して娘は声を上げなかった。息が出来るぐらいには緩く締め付けているのだが、まるで人形のように黙りこくつている。恐怖で震えているのか。

「……ん？ お前は——あの時の……？」

よく見ると、娘の姿には見覚えがあった。どこで見たのか……記憶を思い出す。

そうだ。以前人間界に降りたときに出会った娘だ。たまたま、狐に化けて山を歩いていたので、運悪く罫に嵌って難儀していたときだった。通りすがりのこの娘に、助けられたのだ。

首を絞める尾を緩める。ようやく、小さな声が聞こえてきた。

「……オヤシロさま、どうぞ私を早く、喰らってください」

「なんだと？」

「私は生贄でございます。こうして来たからには……覚悟は出来ております」

娘は指をつけて頭を下げたようだ。その声は小さいが、震えてはいない。恐れてもいないようだ。

今までの人間とは違う。この娘は、我を化け物とは思っていないのだろうか。なぜだ？

「そうか……殊勝なことだ。今までの娘どもは逃げ惑い無様に叫ぶ者ばかりだったが……」

食われる、と思つていふということは、我が人間を喰らう神だと思つていふのだらう。だが少なくとも、みつともなく叫んだり我を侮辱するようなことは言わなかつた。この娘からは我に対する敬意を感じる。

「ついてまいれ」

娘に興味が湧き、そう告げた。

人間を神域に案内したのは初めてだ。

神の中には気に入った人間がいれば誰でも引き入れるような気やすいものもいるが、我は違う。

神域は人間の入り込めぬ場所にある。ここには不浄のものは入ることができない。その時点で、この娘は資格がある。

だが、人間の世界とは違う場所を見ても、娘は驚きもしなかった。その瞳は暗く沈み、口は閉じたまま。花嫁に選ばれる時点で美しい娘であることに違いないが、まるで感情を失ったように無表情だった。

我は娘に御殿で過ごすことを許した。村へ帰りたいかどうかも聞いてみたが、帰りたくないと言ったのでそのまま置いてやることにした。

奇妙な娘だ。最初は恐縮しているだけだと思つたが、時間が経つても、娘の表情は変わらない。何を与えても興味なさそうで、かけらも笑わない。

娘に尋ねると、どうやら娘は自分が食されるものだと思つて覚悟していたらしい。一体どこの誰がそのような嘘を教えたのか……。

おそらく今まで花嫁になつた娘たちが帰つてこなかったから、そのような噂がたつたのだろう。全くとつて腹立たしいが、せつかくこれだと思つた花嫁に出会えたわけだからつまらないことで水を差したくない。

だが残念なことに、娘が体調を崩したことで初夜は失敗に終わった。

初めての夜だ。緊張していたのだろう。そう思い、特に気にしないことにした。娘も氣に病んでいるようだし、体調が落ち着いたらでいい。いつでも出来ることだ。

神の花嫁になつたものは神にとって特別な存在となる。ゆえに、迎え入れれば初夜の儀式を行い、娘を己の一部とする。というのが通例だが――。

生憎、我も暇ではない。花嫁を貰つたとはいえ、花嫁にばかりかまけているわけにはいかないのだ。

神は仕事をしている。仕事というよりもお役目といった方がいだろうか。天から与えられた大切な役目だ。地上の生き物達が暮らすため、世界を平和に保ち、生を与える。人間界に降りることもある。

「戻つたぞ」

役目から戻ると、娘は御殿の中にいた。何もしていなかったのか、御殿の中から外を眺めていたようだ。

「オヤシロさま……おかえりなさいませ」

「何をしていたのだ」

「外を……眺めておりました」

「そう言つて、先日もそのようにしておらんだか」

この世界は美しいだろうが、じつと見ていても退屈ではないだろうか。それとも長い間ここで暮らしているからそう思うのか。どうやら、娘は起きてからここから動いていないように思う。

「……お前をここに連れて来たのは我だが、閉じこもっているのは良くないぞ。少しは外へ出てみてはどうだ。ここには危険なものはない」

反応がない。この娘は何を考えているのか全く分からない。感情が見えない。こんなことは初めてだ。

「……もうよい。お前の行動を制限はせぬ。好きに過ごせ」

私は娘を説得することを諦め、外に出た。

それから数日の間、娘と共に過ごしたが、娘は必要以上動こうとしないし、喋ることもしない。返事はするが、自ら話しかけてくることはない。その癖、私のことは敬っている態度だから分からない。

——あの娘は一体何を考えているのだろうか。なぜ全てがどうでもよさそうで、感情を露わにしないのか。

私のことが気に食わないのだろうか。花嫁にしたが、娘も村に選ばれただけで、本意ではなかったのかもしれない。

外出から戻るとすっかり夜になっていた。御殿の明かりは消えている。娘は就寝しているようだ。

そろそろ体調も落ち着いてきたようだから、初夜の儀式を行おうと思っているのだが――。ふと様子が気になって娘の部屋を覗きに行った。

娘には部屋を一つ与えた。新たに作ったもので、年頃の娘が好みそうな調度品を揃えたが、娘の反応は薄かった。気に入らないのか、村での生活と違う部分に慣れていないのか。

部屋を覗くと、娘は特別にしつらえた寢床の上で眠っていた。寝ている顔も起きている顔も、あまり変わらない。表情がないからだろうか。

――変わった娘だ。なぜ笑わぬのか……それほどまでに我のことが嫌いなのだろうか。

手を娘の前髪に掛けた時だった。眠っていたはずの娘の目が、驚いた様に見開かれた。

「……っ!？」

驚いた表情で身体を起こし、黙ったまま我の方をじつと見つめる。その瞳に浮かぶのは、今まで娘に見たことがない「恐怖」だった。

……我を恐れている？ 化け物の姿で首を絞めた時すら声ひとつ上げなかったというのに……。

「……驚かせたか。様子を見に来ただけだ」

なぜだ。今まであんな顔はしなかった。まさか寝込みを襲われるとも思っただのか。様子が明らかにおかしい。

声を掛けるものの、娘はやけに怯えた様子で硬直していた。そしてふらりと頭を傾け、そのまま倒れ込んでしまった。

「……っおい！」

娘に手をかざす。どうやら気絶してしまったようだ。

一体どうということだろう。まだどこか具合が悪いのだろうか。いや違う。何か別の理由があるような――。

「……娘、少し記憶を見るぞ」

娘の額に手をかざす。脳裏に娘の記憶が流れ込んでくる。

村の風景……だろうか。娘が住んでいた村だ。その中を小さな少女が一人歩いている。

この娘のようだ。歳はまだ十つほどに見える。幼少の頃からずいぶん整った顔立ちだが、その表情は能面だ。

このように幼い子供の頃からこんな顔をしていたのか……。

そのまま娘について回る。娘は庄屋の子供だった。まだ小さいが、家の仕事をせつせと手伝っている働き者だ。他の村人に比べて大きな家に暮らしているし、愛想の良い父親と幼い弟がいるようだ。

一見、普通の娘だ。裕福な生活を送っているし、他の村人よりは恵まれているように思う。ならばなぜあのように――。

やがて夜になった。娘は寢床に横になる。だが、不意に襖が開いて、娘の父親が入ってきた。

「琴音……」

父親は娘の横に座り、娘にそつと顔を近づけた。

――……これは。

父親が娘の着物の袂をめくり、中に顔を押し付ける。娘は目を開けていたが、その瞳はやはり死んだ魚のように虚だった。

やがて父親が娘に馬乗りになる。鼻息荒く娘の肌を舐めまわし、沸る欲望をぶつけるように娘を穢し続ける。

まさか、父親に――。

おぞましい光景だった。年端も行かぬ子供を組み敷き、獣の如く襲う男の姿。そしてその下で無表情に横たわる娘の姿。

みたこともない恐ろしい光景に、言葉が出なかった。

――あの娘は、自分の父親に犯されていたのか。なんということだ……。

気分が悪くなつて記憶を見るのをやめ、現実に戻る。娘はまだ眠っていた。

「……お前は、自ら感情を消したのか。それほどまでに恐ろしかったのだな……」
初夜の夜、具合が悪くなったのはこのためだったのだ。やけに気分が悪そうだと
思っていたが……。

えもいえぬ怒りが湧く。これほどまでに小馬鹿にされていたとは思わなかった。あの村を消してしまおうか。いや、それよりも……。

眠っている娘の頭を撫でる。その表情は先ほどよりも安らかだ。

この娘に何をしてやれるのか……分からない。心の傷は深い。体の傷よりも、治すのに時間かかるだろう。

だが、何かしてやりたい。そう思った。



〈琴音視点〉

目が覚めると、明るい光が視界を覆っていた。

ここは、私の家じゃない。その事実にはホツとしつつも、昨夜のことがふと記憶に蘇る。

「……っ」

オヤシロさまが枕元に立っていた。それから……どうなったか覚えていない。思わず自分の体を触って確認する。着物は綺麗なまま、乱された様子は無い。

よくよく考えてみれば……私はオヤシロさまに捧げられた身。食べられなかったとはいえ、この身は彼に預けたもの。どうしようも彼の自由。初夜も結局先送りになっていたけれど、いずれは……。そう思うと、体が震えてきた。

——嫌……っ。やつとあそこから抜け出せたのに、またあんな思いをしななければならぬなんて……。あんな痛くて辛い思いをするならもういつそ死んでしまいたい。

私は恐ろしくなつて御殿の外に駆けた。裏手にある綺麗な池の中に飛び込む。

このまま沈んで、死んでしまいたい。もう誰に穢されるのも嫌だ。

叫ぶ声が聞こえた。水がぼしゃんと跳ねる音がした後、腕が引つ張られて水面の上に引き上げられる。

「ごほっ……」

「何をしている！ 馬鹿な真似はやめろ！」

引き上げたのはオヤシロさまだった。

「……っ離してくださいませ！」

「死のうとしている奴を目の前に離せるものか！」

私は必死で水の中に戻ろうとしたけれど、オヤシロさまの方が力が強く、結局陸に戻されてしまった。けほけほ咳き込みながら、涙をこぼす。

こんなことなら、もつと早くに死んでおくのだった。お父様に犯された時、迷わず死んでおけばよかった。こんな思いをしながら生に縋り付いて、挙句また同じ目に遭うなら……。

「お前が笑わぬのは……父親のせいであつたのだな」

「え……」

「記憶を見た。お前が何をされてきたのか、見た」

—— 見た……まさか、あれを……？

今までのことが頭を駆け巡る。そして同時に、恐怖した。いや、安堵してもいたかもしれない。

私が穢されていたことを知ったら、オヤシロさまはお怒りになるだろう。花嫁の娘が穢されていた。由々しき事態だ。私はきつと殺される。

元々殺されるつもりでここに来た。辱めを受けるぐらいなら、死んだ方がマシだ。

「……ならば、私を罰してください。私は花嫁に、相応しくありません……。ずっと、オヤシロさまを欺いていたのです。死ぬべき人間なのです……」

「それがお前の望みか？」

「左様でございます……どうぞ、殺してください……」

「であれば、生きよ。それがお前の罰だ」

「え……？」

何を言っているの？ 私は神様を騙したのに……。顔を少しあげ、オヤシロさまの顔色を窺う。怒っては……。いない。ように見える。なぜ？

「不服か？」

「なぜ……ですか。私は穢れております。オヤシロさまの花嫁に相応しくありません……」

「それを決めるのはお前ではない。我だ。それに、穢れていると言うが、穢れたものは神域に入ることすら叶わん。ここに来た時点で、お前には花嫁になれる資格があるのだ」

「で、でも……」

「そんなに罪滅ぼしがしたければ、私の望み通りここで過ごせ。お前のその愛想の悪い顔は見飽きた。世俗のことは忘れ、ここで新たな人生を歩むのだ。ここにはお前が恐れるものは何もない」

私は助けられたのだろうか。なぜ？ オヤシロさまを欺いたのに。

ひとつ、分かる。オヤシロさまは村のみんなが恐れるような恐ろしい神様ではない。尖った言葉とは裏腹に、とても優しいお方だ。

「よいな」

私はいと答えるしかなかった。でもさつきと違って、なんだか安心していった。

「それと」

「はい……?」

「私の名は綾だ。オヤシロさまは村人達が勝手に呼んでいる名。これからはそう呼べ。よいな」

「はい……綾様」



以来、オヤシロさま——綾様は私のそばで過ごされることが増えた。

最初はただ放置しているだけだったけど、最近はそばで見守ってる……そんなふうを感じる。

私あまり話さないから、話すのはもっぱら綾様。綾様は私のことをよくお尋ねになる。食べ物のことや生活のこと。人間のことを理解しようとなさっているみたいだ。

「ふむ……人間はまこと奇天烈だな。そのように野菜を焼いたり煮たりして美味しいのか？」

作ってもらった炊事場で調理していると、後ろで眺めていた綾様が珍しそうに言う。

「美味しい……というより、生ではお腹を壊してしまうので……」

「そうか。我は腹など壊さぬのでな」

「あの……もしよろしければ、お召し上がりになりますか……？」

見ているだけの綾様がなんだか気の毒になってついそう言ってしまった。だけど、人間の食べ物なんて神様に差し出すのは失礼な気がして、すぐに謝る。

「……申し訳、ございません。差し出がましい真似を致しました……」

「そう言うなら食ってやろう。お前が美味しいと思うものを出せ」

「え……よいのですか」

「言っただろう。神は腹など壊さぬ。腐ってなければ問題なからう」

「そう仰るなら……。だけど、神様に差し出すものが粗末であつてはならない。私は慌てて品数を増やすことにした。」

ここに來てからは一人で食べていたし、味なんてどうでもよかつたから適当に野菜の煮浸しや和物だけで済ませていた。一人分だけ作るのは面倒で、それに食欲もなかつたから興味もなかつた。

けど、今日は久しぶりに食事らしい食事だ。

村から献上された米や野菜を使って、なんとかそれらしい膳を用意した。

「お待たせしました。あり合わせですが……」

台の上に作った食事を並べると、それなりに豪華に見えた。村で暮らしていた時よりもかなり豪華な食事に思えたけど、神様にとってはどうか分からない。口に合わないかもしれない。

綾様はおかずの一つをひよい、と箸で掴むと口に放り込んだ。

「うむ……変わった味だな」

「も、申し訳ございません。お口に合わなかった、ですよね」

「食べたことのない味だが、美味しい。これはなんだ？」

「これは……菜の花に、大豆を炒つたものを細かく潰してあえたものです。醤油で軽く味付けをしています」

「そうか。食感が変わっていると思ったら大豆であったか。お前は料理がうまいのだな」

「そのような……私など、このようなあたりさわりのないものしか作れません」

村にいた時は……料理は私が作っていた。お母様は料理がお上手な方だったから、お父様は私にも同じものを求めた。お父様の好みの味付け。お父様の好みの装い。何から何まで、お父様は私を支配した。

『———琴音、お前の母は貞淑で控えめで、母親の鏡のような女だった。お前も見習え。そのような目立つ帯はやめて、もっと大人しい色にするんだ』

……そんなふうに、言われたこともあった。今となっては過去のことだけ

ど……綾様も、そんな女性の方が好ましいと思うはず。

「我は料理のことなど分からぬ。だが、これは美味しいと思うぞ。真心がこもっている」

綾様は嬉しそうに笑った。大したものなんて作っていないのに。もしかして、綾様は粗食なんだろうか。いいえ、神様だから人間の食べ物珍しきだけかもしれない……。でも、喜んでもらえてよかった。

「……ありがとうございます」

「もし良ければまた作ってくれ」

「綾様は……どのようなものを好まれますか」

「好みか……料理はせぬが、以前村から献上された魚で美味しいものがあつたな」

「魚、ですか」

「焼いてあつたのでな。食ってみたのだ。さっぱりしていて美味かつた」

「なんの魚でしょう。こちらで手に入るでしょうか」

「なんだつたか……おお、確かアマゴとかいったか。村の近くで捕れたと言つておつた」

アマゴ……確か、村の子供達が川で獲っていた。捕れるかどうか分からないけど、運が良ければ一匹ぐらいは持つて帰れるかもしれない。

——でも……。私はここから一度も出たことがない。花嫁になって以来、外に出ていない。行けるのだろうか。洞窟の外に……。



翌日、綾様はお役目のために出掛けた。夕方までには戻ってくると言っていたからそれまでの間私は一人だ。

一人でいても御殿は綺麗で掃除するところがないし、畑仕事もない。手持ち無沙汰だ。

時間もあるし、一度洞窟の外に出てみようか。川に行くだけならそれほど時間もかからないはず。

私は花園を歩き、一度だけ通ったその場所を目指した。

洞窟は変わらずそこにあつた。洞窟の奥は、この世界に不釣り合いなほど真っ暗。

神域は不浄のものは入れないって言うけれど……それは人間の世界が穢れている、って意味かもしれない。

闇の中に足を踏み入れる。以前ここに入った時は恐ろしくなかつたのに、今は少し怖い。でも大丈夫なはずだ。あちらの世界のことはよく知ってるのだから。

洞窟を奥へ奥へ進む。しばらく歩くと、一番奥に小さな光が見えた。どうやら外に着いたみたいだ。

光を目指して歩いてくと、やがて見覚えのある光景が目に入った。ここは……神輿を降りた場所だ。オヤシロさまの山の中腹。でも普段人が立ち入らない場所だからか、山の中はとても静かだ。

——川に行かなくちゃ。

私は山を下った。川は山と村の間あたりにある。それほど大きくない川だから子供でも入れる。私も幼い頃は川で遊んだことがあった。

川にはちょうど誰もいない。手掴みでどこまで捕れるか分からないけど、魚があれば食事もしは華やかになる。綾様も喜んでくれるかもしれない。

——花嫁になつてから、ずっとお世話になりっぱなしだもの。これぐらいしないと……。

だけど魚捕りなんて慣れていないせいか、手掴みで捕るのには限界があった。村の子供達はうまいこと捕っていたのに、何が違うのだろう。

夢中になって川を漁っていると、ふと人の声がした。

「琴音……？」

その声に弾かれたように振り返る。そこにいたのは村の男の一人だった。

「お前……どうしてこんなところにいるんだ。花嫁になったはずなのに……」

——しまった。まさか村の人に見つかってしまふなんて……。

魚捕りに夢中になって油断していた。自分は花嫁になった身。こんなところにいたら変だ。

「……っ来い！ 村長に報告しなければ！」

「あっ……」

ぎぶぎぶと川の中に入ると、私の手を無理矢理掴む。

「いつ……いやです！ 離してっ……」

「まさかオヤシロさまのところから抜け出してきたんじゃないだろうな!? オヤシロさまの怒りを買ったらどうなるか……っ」

どうしよう。大変なことになってしまった。考えもせずにこんなところに来たから——。

私は村に連れて行かれた。そのせいで、村は大変な騒ぎだ。花嫁になった私が出戻ってきてみんな混乱している。いや、怒っている人たちがほとんどだ。

「琴音！ なぜ戻ってきた!？」

村長が大声で怒鳴り立てる。私は村人達に囲まれ、糾弾を受けた。

私が逃げ出したと思っているんだ。今まで、花嫁が村に戻ってきたことは一度もない。綾様は生贄の娘が不敬な態度をとったから獣にしたと言っていた。だから誰も戻っていないに決まっているんだけど……。

考えが足らなかつた。川は村に近い場所ではないし、そう人も来ないと思つてた。まさかあんな時に村人に見つかつてしまうなんて。

「答えろつ！」

村長の掌が私の頬に飛ぶ。頬に衝撃を受けて、私は思わず地面に倒れた。

「名誉なお役目を放り出してすごすご村に変えてくるとは、この不屈き者

めつ！ 恥を知れつ」

「うっ……」

足蹴が私のお腹に当たる。村長は激怒している。あれだけ村が気を遣つていたオヤシロさまのことだ。怒りを買いたくないんだらう。

でも、実際のオヤシロさま……綾様はお優しい方だつた。私が穢れた女だと知つても、責めずに受け入れてくださった。

「お前が逃げ出せばつ！ この村にどんな被害が及ぶか分からないのかつ！」

一発、二発と蹴りが当たる。村人達は村長と私を見ているだけで、何もしようもない。ううん……したくないんだと思う。みんなもきつと、村長と同じ。私が生贄として大人しく死ねば、自分たちが助かると思っっている。

——お父様……。

霞む視界にお父様の姿を探した。私と村長をぐるりと囲むように集まった村人達の中、お父様の姿はすぐに見つかった。

お父様は冷めた目つきで私を見つめていた。いつもの夜とは違う、私を支配していた優しい父を演じているときとも違う。軽蔑した目だ。

分かっていったのに……。どうして助けてくれるかもしれないなんて思ったんだらう。お父様が私を助けるはずなんてないのに。

この村の人たちは私のことなんて信じてない。誰も話なんて聞いてくれない。綾様も、私が逃げ出したって思うだろうか。恩知らずの穢らわしい娘だつて。

「鎌を持って来い」

村長が告げる。猟奇じみた声を聞くと、村人の一人が慌てて駆けていく。やがて鎌を一振り持つてくるとそれを村長に手渡した。

「オヤシロさまの怒りを鎮めるためには……花嫁を殺さねばならん」

ジリジリと村長が近づく。思わず逃げようとした私の腕を村人達が取り押さええた。

殺される——。そう思った瞬間だった。視界を覆うほどの激しい閃光と爆発するような音が響き渡った。

「うわああああ！」

「雷だ！」

村人達が蜘蛛の子を散らしたように一斉に慌てふためく。村の家がいくつか燃えていた。

「こいつだ！ こいつが逃げ出したからオヤシロさまがお怒りなんだ！」

「早く殺せ！」

地面に蹴り倒され、手足を押さえ付けられる。村長の振り上げた鎌が私の首を狙っていた。

阿鼻叫喚の音がする中、目の前で閃光が弾けた。村長の体が光り——いや、村長の鎌に落雷した。轟音と共に村長が稲妻に打たれ、黒焦げになった。村長はそのまま地面に倒れた。

私は呆然とした。見たこともない天変地異が目の前で起こっている。

「不屈き者め……目を瞑ってやっていらが、今日ばかりは我慢ならん」

その声は上から降ってきた。私が驚いて顔を上げると、空から綾様が舞い降りた。その様子はさながら、天から遣わされた使者のように神々しかった。

村人達は一斉に鎮まっていた。綾様が明らかに人間ではなかったからだと思う。一目でオヤシロさまだと分かったのだろう。皆が頭を下げて地面に伏せつた。

その中で、一人の男が前へ出て、綾様に首を垂れた。お父様だ。

「お……つオヤシロさま！　どうかお許してください！」

お父様は必死に謝つた。花嫁を出したのが自分の家だと分かっているから、咎を受けると思つたのだろう。

「ほう……許すということは、お前は自らの罪を理解しているということだな。ではその罪、述べてみよ」

「は、花嫁を……つ逃げ出させて、しまったことでございますっ！　このように、不屈な娘を、花嫁に選んでしまい……っ」

綾様がふつと笑つた。だが、その笑みは決して純粹なものではないように見え
た。

「不正解だ。見当違いも甚だしい」

そう言った瞬間、お父様の体が音もなく後方に弾け飛んだ。どさつと鈍い音を立てて地面に崩れるのを見ると、綾様は私に近付いた。

「あ……」

ああ……綾様も私が逃げ出したとお怒りなんだ。私が愚かなことをしたから恩知らずだと思っている。たくさんよくしていただいたのに、恩を仇で返してしまうなんて。

「……怪我をしているな」

綾様は倒れている私の体をひよい、と横に抱いた。

——え？

そして、眉間に一層シワが寄る。

「お前らの罪は私の花嫁に手を出したことだ。かねてより私の意思とは無関係に間に合わせ程度の花嫁の娘を送りつけておつたことに腹を立てていたが……此度のことは我慢ならん」

背後で更に一発雷が鳴った。あたりが夜のように暗くなり、村の家が茫々と燃えている。まるで綾様の怒りを現すように。

「この娘は我が花嫁。神の眷属と同等。今度勝手な振る舞いをすれば村が地の底に沈むと思え」

あたりが燃えていく中、ふわりと体が浮いた。私は綾様に抱かれるまま山の上を飛んでいた。

——— どういうこと……？ どうして綾様は……。

やがて洞窟の奥、神の住処へ戻った。花園の中に、私の体がすとんと下される。

「……傷だらけだ。手荒な真似をされたのか。痛い場所はないか」

「あ、あの……綾様……なぜ、私を罰しないのですか……」

「なぜだ」

「それは……」

綾様はきつと、私が逃げ出したと思っているはず。何も言わずに抜け出したんだから、当然だ。、村人達だつてそう言っていた。

「……怒っていないわけではない。帰つて来たらお前がいなくなっていたのだ。驚きもするだろう」

「やっぱり……」

「なぜ、外に出たのだ。外はお前にとって嫌な記憶がある場所だろう」

「……魚を、探しに行つたんです」

「魚？」

「アマゴが……美味しかったと、おっしゃっていたので……山の麓の川で捕れたと、以前聞いたことがあって……それで……」

「つまりお前は、魚のためにここを抜け出して村人達に捕まったというわけか。まったく、間抜けにも程があるぞ」

綾様は深いため息をついた。

「どうして……お怒りにならないのですか。罰を受けるのは私なのです。私が勝手な真似をしたから……。逃げ出したとお思いになるのが当たり前ではありませんか」

「お前は逃げ出すようなおなごではあるまい。それぐらい分かる」

どうして信じてくれるのだろう。私はまだ綾様のことを知らない。綾様も、私のことを知らない。

「お前は嘘をつくような性格ではない。死ぬ覚悟で花嫁になったのだろう。あんな目の据わった奴がそうそう逃げ出すものか」

「ですが……」

「馬鹿者め。申し訳ないと思うのなら何も言わず出掛けるな。ない肝が冷えたぞ」
——申し訳、ごさいません……。

ほっとしたせいかわ、途端に目から涙が溢れた。泣いたのなんていつぶりだろう。お父様に抱かれた日ですら、泣かなかったというのに。

信じてくれた。綾様は、私のことを信じてくれた。それだけなのに、それがとても嬉しかった。

第二章

その翌日、綾様は私が危ない目に遭わないようにと御殿の近くに川を作ってくれた。その中に魚を放して、とりあえず魚には困らなくなった。

綾様が暮らす神域は見渡す限り花園。あまり意識していなかったけれど、花園以外はほとんど何も無い。御殿の裏手にある桃梨の木と池があるだけで、誰も住んでいないみたいだった。

「あの……綾様。この場所には、綾様以外の方は住んでいらつしやらないのですか」

一緒に川までついて行くと行って、私は川の中に。綾様は川べりでそれを眺めていた。

「いないな。神の領域とは、各々で作るものだ。ここは私の場所。他の神は滅多と入って来ぬ」

「では、ずっとお一人で……？」

「そうだな。だが、普段は人間の世界を見回っていることが多い。別に気にはならない」

一瞬、とてもお寂しそうと思った。でも、神様は特別な存在だから、そういう感情はないのかもしれない。

綾様は私が花嫁というだけでとても優しくしてください。本当は寂しかったんじゃないだろうか。なんて、失礼なことはいえないけれど……。

「綾様は……お強いんですね。私など、村でも一人でいると心細くて、このような場所で一人きりになったら生きていけないかもしれないかもしれません」

「そうだな。だから神にも花嫁は必要なのだ。花嫁は神の活力となる。全ての力の源だ。だが、そのような娘はそうそう見つからぬ」

「そうなのですか？」

「神の花嫁とは、送り込まれたからといって簡単になれるものではない。清い精神が必要だ。あとは、その神と波長が合うかどうかだな。美しければ誰でも良いわけではない」

綾さまの話はなんだか納得がいった。神様の伴侶は清くなければならない。私もそう教わっている。だからこそ後ろめたかつたんだけど……。

——ならば、私は絶対に無理ね。こんな身では、どこにもお嫁にいけないだろうから。

なんだか気持ちちがモヤモヤしてしまう。どうしてこんな気持ちになるのだろう。最初から分かっていたことなのに。

「よし、我がやってやろう」

ぼうつとしてしていると、綾様が川の中に脚を浸けた。

「あ、綾様……濡れてしまいます」

「構わん。すぐに乾く。むっ……なかなかすばしっこいのだな」

流れの遅い川とはいえ、魚の動きは早い。手掴みで取ろうと思うから余計にだ。

綾様、あんなに慌てて追いかけては余計に魚が逃げてしまうのに……。そう思つて声をかけようとしたときだった。体勢を崩した綾様の体が勢いよく私の方に倒れてくる。バシャンと大きく水が跳ねた

気がつけば私の体は水浸しで、綾様もそんな私に覆い被さるように川の中に倒れていた。

——あ。

体の奥からぞわぞわした感覚が蘇る。頭の中にここにいないはずの人物が浮かぶ。えも言えぬ恐怖が襲いかかった。喉の奥から気持ちわるいものが出て来そうで、気分が悪い。吐きそう。いやだ。やめて。お父様……。

「琴音！」

綾様の声が聞こえた。水の中で呆然としていた私は、綾様に引き上げられて川のほとりに戻される。体が震えている。寒いからじゃない。

「……すまなかつた。体が冷える。今日はもう帰ろう」

綾様は私からぱつと離れると御殿の方に向かって歩き始めた。

——気分を悪くさせてしまった。

村のことは忘れようと思った。私はもうあの村に帰ることはないのだし、犬に噛まれたとでも思えばいいと綾様も言ってくれた。

でも……現実はその簡単にはいかない。どうしてもお父様の顔が頭にチラついてしまう。

御殿に戻り食事の支度をする。綾様はやっぱり怒ってしまったのか、なんだか機嫌が悪そうだ。いろいろ親切にしていただけに、どうしてちゃんと出来ないんだろう。

落ち込みながら台所に立っていると、奥から綾様がやってきた。

「綾様……」

「気分はどうだ」

「……申し訳ありません。先程は不愉快な思いをさせてしまつて……」

「我のことなら構わぬ。琴音のことを心配しておるのだ」

「……申し訳ありません。忘れたいのに、どうすればいかわからなくて……」

お父様とのことはなかったことにならない。私は穢れたままで、オヤシロさまの花嫁にはちつとも相応しくない。

「今夜……初夜の儀を行おうと思つているのだが、どうだ」

どくん、と心臓が鳴る。

そうだ……いつかはしなければならんだ。私はここに置いてもらっている身分。綾様の花嫁。花嫁としての仕事をしないと……。

「……わ、分かりました」

「楓と紅葉に用意をさせよう。お前はゆつくりしていればいい」

綾様が出て行く。身体からどつと汗が流れた。

———どうしよう……。ちゃんとできる自信なんてない。

綾様は私が生娘でないと知っている。だからそこはいいんだけど……。怖い。あんなことをされるのかと思うと、身がすくむ。

私が緊張しながら御殿の中をウロウロしていると、楓と紅葉が声を掛けにきた。

「花嫁さまー！ 湯浴みの準備が整いました！」

「たー！」

二人は相変わらずニコニコしているけれど、私は緊張で顔が引き攣っていた。

「花嫁さまー？　もしかして緊張してるー？」

「るー？」

「あ……はい。少し……」

「大丈夫だよー。しょやほとつてもきもちいいから」

子供なのになんてことを言うのだろうか。でも、二人のおかげで少しだけ気分が和らいだ。

やがて夜が来て、私は以前と同じ部屋に向かった。いつぞや私が倒れてしまった部屋は、また綺麗に整えられていた。

心臓が高鳴る。綺麗に敷かれた布団の横で、私は正座して綾様を待った。

少し待っていると足音が聞こえた。身体が硬くなる。握った手のひらに汗が滲んだ。

「琴音、待たせたか」

以前と同じ、ゆつたりと寝巻きを着た綾様が私の真正面に座る。

「気分はどうだ」

「大丈夫、です」

「……嘘をつくな。声が震えているのではないか」

そう言うと、私をそつと抱きしめた。

「あ、綾様……っ」

「ここは苦しみのない桃源郷だ。お前は我の花嫁となった。我がお前を幸福にしてやろう」

優しい声。綾様ならきつと、ひどいことはなさらないはず。ただ、やつぱりどうしても以前のことを思い出して怖くなってしまう。

またあんなに痛かったらどうしよう。気に入らない態度を取ったら叱られてしまうかもしれない。

「琴音……」

「はい……」

「約束しよう。お前を傷つけるようなことはしない。辛いこともしない。だがもしそれでも嫌だと思うときは言え。お前は我の花嫁だ。我はお前の意思を尊重する」

「だ、大丈夫です……頑張り、ます」

「安心するがいい。初夜の儀式は人間にとって辛いものではない。お前にとって心地よいものとなるだろう。だが、儀式の前に説明しておかねばならぬことがある」

「はい……」

私は姿勢を正し、綾様の声に耳を傾けた。

「神に捧げられる花嫁には役割がある。神の力の源を生み出すことだ」

「力の源……？」

「私がお前に精を注ぎ、お前の中で私の力が育つ。花嫁は清い気を持っているから神の力を増幅させる力があるのだ。そこで育てた力を我が再び取り込めば……」

私の力が増えるというわけだ」

私は言われたことを頭の中で囁み碎いた。学はないけれど、なんとなくわかったと思う。

「難しいか？」

「いえ……」

「神の力はそのまま自然界に反映される。従って、力のない神が管理する土地は荒れてしまうのだ。だが、神の力は無限ではない。どこかから取り込まねばならぬ」

「それが……花嫁、なのですね」

「そうだ。とはいえ、人間は我々の事情を知らぬ。しかし、このようなことから神は自らの花嫁を見つけ出さねばならぬのだ。しかしそれもまた難しい話……我は偶然とはいえ、琴音と出会うことが出来た。人間のお節介もたまにはありがたいものだ。お前にとつては災難だっただろうがな」

「いえ……そんな……」

「痛んだり苦しい思いをすることは一切ない。お前が懸念するようなことは何一つないと約束しよう」

綾様は立ち上がると、そばに置いてあった変わった形の腕を私に手渡した。

「これを飲め。儀式は体力を使う」

台座がついた不思議な形の腕の中には薄桃色の液体が入っていた。なんだか甘い香りがする。落ち着く香りだ。私はゆつくりと口をつけた。

「……甘い、です」

「御殿の庭にある桃梨で作った果実酒だ。冷えたものもうまいが、温めてもうまかろう」

不思議な味だ。とろんとしていて、甘みがあつて、なんだか安心する香り。とても美味しいと思う。

「お前は我の花嫁となった。大切にすると約束しよう。安心して身を任せてくれ」
流されるまま床に座ると、綾様の体が近付いた。薄い唇が押し付けられる。そのまま唇で私の唇に触れたり、食むように触れる。どうしてこんなことをするんだろう。行為の意味は分からない。

「ん？ どうした？」

「あ、の……この行為は……どんな意味が……」

「いづれわかる」

ふつと笑うと、綾様はその行為を繰り返した。

しばらく繰り返すと息が荒くなってくる。ずっと口を閉じているから、息が苦しい。ううん、それよりも胸がドキドキして落ち着かない。

「息を我慢する必要はない。口を開けてみる」

言われるまま、呼吸を整えながら口を少し開ける。綾様はまたそこに唇を押し付けた。

「は……っん、んう……」

綾様の舌が私の口の中に入り込む。私の口の中を舐めながらくちゆくちゆと水音が響く。綾様の呼吸も、私の呼吸も段々荒くなっていく。頭がぼうつとずる……。なんだか身体が熱い。

「……いい子だ。上手に出来たな」

「は、い……」

着物の帯を緩められて肩から少し着物をはだけさせられる。薄い胸が露わにされ、微かに上下しているのが見えた。

—— やつぱり、怖い。お父様を思い出してしまふ……。

『琴音、声を出すなよ。声を出す女はみつともないぞ』

痛いと泣く私にお父様はそう言った。必死に声を押し殺して耐えた日々。私に許されたのはただ身体を差し出すことだけ。我慢しなければ。何があっても、声を出したらいけない。

「出会うた時から貧相だとは思っていたが……お前は細すぎるな」

「……っ申し訳ありません」

「お前を責めているのではない。……可哀想に。中の気が抜き取られてしまっている」

「え……?」

「人は身体の内を蓄える。生命を生み出すために必要なもので、生き物の動力だ。気は心に反映される。お前の心が沈めば無くなり、満たされれば増える。そういうものだ。」

綾様は説明しながら私の胸を触った。

「望まぬ関係で疲弊したのだろう。清い気は邪なものを引きつけやすい。私の気を注いでやるゆえ、少し我慢してくれ」

綾様は何度か私の胸の上を手で優しく撫でると、片方の胸の頂に口を付けた。

お父様と同じ行為でとても怖い。勝手に体が震えて、心が沈んでいく……。

「……っ」

乳首の先端を舌で舐められると、身体がびくんと震えた。綾様は優しくそこに舌を這わせる。なのに、気持ち悪さを感じない。お父様の時とは違う、温かい気持ちを感じた。

——なんで、だろう。お父様と同じことをしているのに……。

ちゅ……と音を立てながら綾様がそこから唇を離す。

「今ここに、気を注いでやった。気分はどうだ……？」

「あ……その、なんだか……不思議な感じです。胸の内が暖かくて……心地よいよ
うな……」

「神の気は清浄無垢なものだ。お前の中にある悪いものを取り除き、無くなった
気を満たしていくだろう。さあ、もう一つも……」

「ん……っ」

もう片方の胸にも口を付けられ、頂に唇が吸い付く。優しい刺激だ。ただ触れ
て、舐めているだけなのに私の内側にある何かを満たされていくのを感じる。

なんだか、体がぞくぞくする。そこに触れられると気持ちよくてつい声が出てし
まいそうになる。こんなことは初めてだ。

綾様が頂から唇を離し、私の顔を見上げる。指先で先ほど吸った頂を指でやわやわとこねると、堪えきれなくて吐息が漏れた。

本当に変だ。今までこんなふうになったことないのに……。相手が綾様だからだろうか。

じっと見つめていると綾様が顔を上げた。

「……どうした？」

「あの……身体が、変なんです……」

「変とは？」

「さつきから……なんだか、熱くて……奥が、ぞわぞわするとか……ごめんなさい。うまく言えないんですけど……」

「それでいい。正常な反応だ。お前が不快でないのであればそのまま身を任せてくれ」

そのまま胸から身体全体に口づけを落としていく。くすぐったい感覚が襲い、同時に息が荒くなる。心地いい感覚だ。以前に感じたような気持ち悪いものじゃない。やがて綾様の手の指が私の身体を撫で始めた。脇腹や二の腕に指先をゆつくり這わせていくと、くすぐったい感覚にまた身体の奥がゾクゾクしてしまう。

「ちゃんと感じるようだな」

「え……」

「我の上に四つん這いになれ」

そういうと綾様は布団の上に横になった。綾様は体格がいいから、四つん這いになると結構足を広げなければならぬ。私は言われた通り四つん這いになり、確認するように綾様を見つめる。こんな格好をしたのは初めてだ。綾様は何をするつもりなんだろう。

「おいで。胸を、ここに」

私はよくわからないまま、胸を綾様の顔の近くまで持つていく。微かに垂れた小さな胸に、綾様の唇が吸い付いた。

「んんっ……」

「こうして……気を注いで、たくさん慈しんでやれば、お前の胸も元の大きさに戻るだろう……気持ちいいか？」

「っあ……変、です……さつきから身体が……ゾクゾクする……っ」

「それが気持ちいいということだ。お前は今まで邪なものに害されていたのだ。快感を感じる暇もなかっただろう」

綾様の口先がちゅうつと優しく頂を引つ張るとまた同じ感覚がした。

気持ちいい——これがそうなんだろうか。よく分からないけれど、お父様の時とは確実に違う。お父様の時は早く終わって欲しいと思つていただけ、今は……もつとして欲しい。そう思つてしまう。

手が震える。頭が痺れて、身体が熱くなってくる。綾様が触れるところ全部が
気持ちいい。

指先がぐにと胸の先を摘んだ。そことは関係ない場所……脚の間がうずうずし
て、変な気持ちになる。

「ふ……硬くなっているぞ」

「あ……っも、申し訳ありません……」

「叱っているのではない。お前が感じてくれているのならば我も嬉しい。もつと気
持ちよくしてやりたくなる」

「っは……あっ……」

片方の胸に口をつけ、もう片方の胸を指で弄る。両方の胸から刺激を感じて、四
つん這いになった腕が震える。

どうしてこんなことをされると気持ちいいんだろう。綾様が気を注いでくださったからだろうか。全然違う。何もかもが。

「……辛いかな？」

私が震えていたからだろうか。綾様が尋ねた。私は首を横に振った。

「我の前では思ったことを言えがいい。不快なら不快、気持ちいいなら気持ちいいと言ってくれ」

「……気持ち、いいです」

こんなことを言っただけでしたくないだろうか。私の心配をよそに、綾様は嬉しそうに口角を上げた。

その手に導かれるまま、私はまた綾様と口付け合った。今度は怖くない。綾様に触れてもらえるとなんだか嬉しくて、ぎゅつと抱きしめられると心が満たされた。

ぺたんと腰をつくくと、下からぐりぐりと硬いものが当たる。つい驚いて腰を浮かせると綾様が苦笑した。

「すまない。我も男なのでな」

「あつ……」

ぐるりと体勢が交代し、私が仰向けに、綾様が馬乗りになった。

「今から琴音が嫌になる程気持ちよくしてやろう」

「あ、やあつ……」

綾様は既に乱れていた私の着物を割り開き、私を生まれたままの姿にしてしまった。貧相な体を見られて恥ずかしい。一人だけこんな格好をしているとみつともな
く思えてくる。

私が涙目で顔を逸らしていると、綾様がそつと頭を撫でる。

「恥ずかしがっているのか？ 愛い奴だ」

「恥ずかしい……です……」

「ふつ、今からもつと恥ずかしい行為をするぞ」

「ああっ……」

膝を割られ、脚を左右に開かされる。まじまじと秘部を直視されて、顔が焼け
そうに熱い。

「綾様あ……つおやめください……つそこは、汚い場所ですから……」

「お前の身体に汚い場所などあるものか。いいからもつとよく見せてみる」

割り開かれた脚の間をじつと見つめられる。誰にも見せたことのない、場所だ。
お父様にだつて、そこまでまじまじと見られなかったのに。汚いのに。そんなに
見られたら恥ずかしい。

「ヒクヒクさせて……ココが動いているぞ」

「んうっ……♡」

つん、と指先で秘部に触れられる。下半身がびくん！ と反応して腰が揺れた。

「駄目です……つ綾さま……見ないでください……っ」

「駄目だ。花嫁の身体だ。しっかりと確認しておかなければな」

私の静止も聞かず、綾様は両手で秘部を左右に広げた。普段隠された場所が外気に晒されてひんやりと感じる。けれど、私はそれ以上に羞恥を覚えた。

全部、綾様に見られてしまっている。清めたとはいえ、汚い場所だ。そんな場所を広げられて、こんなに見えるようにされてしまうなんて。

「桃梨のように綺麗な色をしているぞ。琴音の性器は美しいな」

「いやあ……恥ずかしいです……っ」

「そうか。だが、琴音のこの場所は見られて興奮しているようだぞ。ツノのように立ち上がっている」

秘部の近くに指が触れた。つん、とその場所に指の腹が触れると、私の身体が目に見えて揺れる。

「んあ……♥あ、そこお……つ♥♥」

一瞬、気が変になりそうだった。感じたことのない奇妙な感覚が私を襲った。

「ここが気持ちいいか？」

開かれた脚にグツと体重をかけられ、より性器が露出される。綾様はヒクヒク動くそこに唇を押し当てると丁寧な舌で舐め始めた。

再び指がそこに触れる。ぴくん、と秘部が収縮して吐息が荒くなる。

「だ、だめえ……つ♥♥そこ、舐めたら……んっあああっ♥♥」

柄にもなく大声を出してしまう。慌てて口を噤むけれど、柔らかい感触が緩やかな刺激を与えて、とても我慢できそうにない。

「どうした。腰が魚のように跳ねているぞ」

私を感じているとさらに刺激を与えるように舌が小刻みに動く。硬い部位を舐めるたびぴくん！　ぴくん！と身体が跳ねた。

「んあつ……♡ああ……♡♡そこ、舐められたら……変になりそう……です……♡♡」

「陰核は女の身体の中で最も感度が高い場所だ。興奮すると……このように大きく硬くなる」

「はうっ……♡」

ぐい、とむき出しにされた陰核が外に晒される。すっかりツンと形を尖らせ、ふるふると震えていた。あんなふうになくなってしまふなんて……。なんていやらしい姿だろう。

再び綾様が陰核に触れ、優しく、ねっとり舐めていく。敏感な場所だからか、それだけで腰が浮いて、お腹がびくびく動いてしまう。

気持ちいい……♡ずっとこうしてたいくらい……。

「っあ……♡♡」

突然、秘部に何か触れた。綾様の指が、私の秘部の入り口を指で撫でている。でも、なんだかいつもと違う様子だ。

アソコがねちよねちよする。まるで何か液体をかけられたみたいにくっしよりと潤っていた。

「たっぷり濡れているな……」

びしょびしょになったアソコを舐めながら綾様が微笑む。かあつと顔が熱くなった。

「……もっ、申し訳、ありません……っ」

「何を謝っている？ 愛液が出るのは当たり前のことだ」

「あ、い……えき……？」

「琴音の性器から出たものだ。女は興奮するとこのようなものが出る」

……でも、そんなの今まで一度だつて出たことがない。こんなに気持ちよかつたこともない。

「愛液は気持ちがいいと出るものだ。悪いものではない。気が高まらぬまま行為に及べば琴音が傷付くことになる」

そういつてすっかり濡れそぼつたそこを指で撫でた。

「催したと思つたか？」

「は、い……」

「催しても構わぬぞ。琴音の出したものは全て我が舐めてやろう」

「そんな……汚い、です……」

「汚いものか。花嫁とは清浄な存在だ。その全てが神の力を増幅させる力を持つ」

「あ……っつ♡」

つぶ……と秘部に指先が入る。ゆつくりゆつくりと。異物感がする。私の中が、指を押し上げているのがわかる。

「痛くないか」

「はい……」

第二関節あたりまで入れると、綾様はまた陰核に舌を這わせた。くちゆくちゆと音を立てながらそれに合わせて指を少しづつ奥へ進めていく。

——痛く、ない。

自分でも不思議だった。指を入れられたことはないけど、そこに入れられる時はいつも痛かったのに。愛液のおかげだろうか。

「指が全て入ったぞ。琴音、よくやったな」

「あ……は、い……♡」

奥で指先が動く。中を押し上げられると、えもいえぬ感覚がした。指がゆつくりと引かれ、そしてまた奥へと入っていく。じわじわと中から液体が漏れ出しているのが分かる。特に、綾様の指がお腹を押すと、おしっこが出てしまう時のあの感覚を感じた。

「あつ、あつ、あつ……♥駄目……そこ押しちゃ……っ♥♥気持ちよくなつて……しまいます……っ♥奥から、なんか出て……♥♥」

「いいぞ……っもつと出してみろ……」

じゅぷつ♥じゅぷつ♥と指が秘部の中に一定の速度で出入りする。お腹の裏が圧迫されて中から何かが溢れてしまいそう。

——気持ちいい……っ♥♥ほんとに、出してしまいそう……っ♥♥

「あつ、あつ……♥♥あ、やさまあ……っ♥♥でちゃいます……っ♥♥わたしの中から……なんか、でちゃいそうなんです……っ♥♥」

「出してみる……っ見てやる」

ズボズボとより一層早く指が出し入れされ、奥を突く感覚に我慢ができない。ムズムズする。中から何かが溢れてしまいそう……っ

「んん……っ！ あ、ああ、ああ……っ♡♡」

ぷしゅっ♡♡ぷしゅっ♡♡と中から液体が吹き出し、指が突くたびそこから泉のように湧き出ていく。綾様の指を伝い、溢れ出た液体が敷かれた布団にしみを作った。

ぬるりと指が抜き取られた。頭がぼんやりする。身体全体がヒクヒクして、力が入らない。

私は今、どうなったんだろう。綾様の指が……舌で陰核を舐められることが気持ちよくて……それで……。

ハツとする。快楽のあまり、失禁してしまうなんて……！

「も……申し訳ありません……つわたし、粗相を……」

よりもよつて初夜にこんなことを。せつかく綾様が気持ちよくしてくださつていたのに……なんてはしたないんだろう。

私がオロオロしていると綾様は嬉しそうにふつと、笑みを浮かべた。

「慌てずとも良い。我がそうなるように仕向けたのだ。それにこれは尿ではない」

「え……?」

「それだけ琴音が気持ちよくなつたということだ」

……失禁、ではないの……? よく分からないけど、悪いものじゃないらしい。

とりあえずホツとした。

「安心しろ。粗相をしてもお前は可愛い」

「そんな、こと……」

「そんなに可愛らしいと、もう入れたくなつてしまふではないか」

綾様は体勢を起こすとようやく着ていた着物を脱いだ。勃ち上がった大きな肉棒が分かりやすく主張している。

「あ……っ」

咄嗟に目を逸らしてしまった。一瞬しか見えなかったけれど、あんな大きなもの……見たことない。お父様のと全然違う。

一瞬、思い出して震えてしまう。また痛い思いをしなければならぬのだろう。あんなもの入れられたら中が裂けてしまいそうだ。

「安心しろ。これが琴音を傷つけることは一切ない。これは中に精気を注ぐためのものだ。気持ちいいことだけすると約束しよう」

怖くて震えていると、綾様が優しく諭してくれた。ぬちよ、と肉棒の先が秘部に擦り付けられる。大きな亀頭がチラチラ見えて、緊張と期待に胸が膨らむ。

「入れるぞ」

「は……、あ、あう……っ♡♡」

ぐっ、ぐっ、と肉棒が中に進んでいく。痛いものを想像していたけれど、そんなことはカケラもなかった。むしろさつきみたい、中が押し上げられて奥が気持ちいい。

「んああ……♡♡綾さまあ……つなかがあ……っ♡♡」

「ん？ 気持ちがいいか？」

コクコクと頷く。アソコいっぱい綾様のものが収まって、心の臓みたいに脈打っている。密着した肌から熱が伝わってきて心地いい。

「では……琴音のココにたっぷり精気を注いでやろう」

「あああっ♡」

中に収まっていた肉棒が動き始める。一番奥にゴツゴツと先が当たって中からじわりと何かが溢れた。

気持ちが良いくてあられもない声が出そうになるのを必死で我慢する。けれど奥を突かれるとどうしようもなく気持ちいい。体も頭の中も溶けていくみたいだ。全部が気持ちいいもので埋まっていく。

「声を……っ我慢、する必要はないぞ……っ。思う存分喘げばいい……っ」

「ひあああっ♡」

勢いよく奥を突かれる。ぐちゅん！ と激しい音とともにゾクゾクと身体を快感が駆け巡った。

「やあああっ……♡あやさまあっ……気持ちいい……っ♡♡気持ちいいです……っ

♡♡

上から見下ろす顔が満足そうに笑う。トロトロにふやけ切ったアソコにぐぼぐぼと音を立てながら肉棒が突き刺さる。

「ふっ……っく、琴音……っそろそろ、精気を中に注ぐぞ……っ」

「あつ、あんっ♡♡は……はい……っ♡♡出して……ください……っ♡♡んあああ♡♡♡♡」

びゅくくっ♡♡びゆるるるっ♡♡びゅうっ♡♡

よく分からないまま返事をする、一番奥に肉棒が叩きつけられた。瞬間、中が何かが弾けたように熱いものが広がっていく。男の人の吐き出すそれとは違う、もつと心地よいもの。じわじわとそれが奥で広がり、身体の中を満たしていく。

「ああ……♡♡あ、あ……♡♡え……？」

肉棒から止めどなく溢れ出すそれに、ふと見ると、私のお腹が少しづつ膨らんでいくのが見えた。中で溢れたものがお腹を圧迫して、まるで赤子を孕んだよう大きくなる。

「あ、綾さまあ……っ♡♡お腹、おおきくなって……♡♡♡♡」

「言っただろう。神は花嫁に精気を注ぎ、花嫁の中で己の力の源を育てるのだ。今
琴音の中で、私の精気とお前の気が混ざり合って力の源が育っている」

「んあああ……♡♡お腹、へんです……♡♡あ……あう……♡♡産まれ、ちやい
そう……♡♡なかに、おっきいのが……♡♡」

ようやく綾様が肉棒を引き抜いた。お腹はぽっこりと膨れたまま、まるで妊婦の
ようになっている。まるで中に赤ちゃんが入っているみたいだ。

「育つのが早いな。さすが、我が選んだ花嫁だけある。力を入れてみる」

「んんっ……くう……っ♡」

私は頑張っていきんだ。お腹の中にある大きなものを産まなければ。綾様が私
の脚を広げて、秘部にぬちゅつと舌を差し込む。

「ふああああっ♡」

生温かい舌がぬぼぬぼと奥に差し込まれる。気持ちいいのがお腹と舌の両方から伝わって身体から力が抜けてしまう。

ぬぼっ♥ぐぼっ♥♥ちゅぶっ♥ぐちゅぐちゅっ♥♥♥

舌が抜き取られ、今度は指が入った。じゅぶっ♥じゅぶっ♥と奥に刺激を与えて、中にあるものを出すように促した。

「琴音、さあ。出してみろ」

「あっ、あうっ♥きもちいいっ……♥だめえ……っでちやいます……♥産まれちゃう……っ♥あ、あああっ、いやあああっ♥」

ぐ、と中から降りてきたものが内壁を押し入り口の肉を広げた。ものすごい快感とともに、私の中から何か硬いものが飛び出した。一つ、二つと、次々と秘部の中から何かが産み落とされる。

「あー……♥ひ、ああ……あうう……っ♥♥」

—— 気持ちいい……♡こんなに気持ちよかったら、頭が変になってしまいそう……♡

既に私の頭はおかしくなりかけていた。秘部から最後のものを産み落とすと、すつかり身体が震えてどうにもならなくなっていた。

「さすが、私の花嫁は優秀だな。初めてでこれだけのものを産み落とすとは。見てみる、琴音。これがお前が産んだ神の御霊だ」

綾様は先ほど私が産み落としたものを顔の近くまで持ってきて見せてくれた。

ぬるぬるしたものがまとわりついていてくれるけれど、綺麗で透明な石みたいだ。きらきらと光っている。

「力のある神が住む土地はこの御霊が自然に出来る。人間が山から掘り起こす石英とも呼ばれている。これはもつと純度が高い。神が直接精気を注いで作り出したものだからな。この御霊が多くある土地は栄えると言われている」

私の脚の間にコロコロと転がっている御霊は七つほどあった。

花嫁の役割は、神の力を増幅させるこの御霊を生み出すこと——。

でも、こんなに気持ちいいことばかりされて、堪え切れるだろうか。今だって朦朧としているのに。

「御霊の良し悪しは神の精気と花嫁の快樂度合いによって変わる。つまり……分かるな？」

私が気持ちよければ良いほど、出来のいい大きな力を持った御霊が生まれるという。私が察して黙り込むと、綾様がもう一度私の間に腰を進めた。

「あ、綾様……つまた……っ♡」

「もう終わりだとも思うたか？ 琴音が気持ちよくなっておらぬだろう」

「わ……私は、十分気持ちよくなりましたから……！」

「ふん、これぐらいでか？ 笑わせる。お前を狂わせるほど善がらせればさらに素晴らしい御霊が出来上がるだろう」

ずぼつと肉棒が再び秘部に沈んだ。すっかり潤ったその場所は難なく綾様を飲み込んでいやらしい音を立てる。

「ひあああああつ♥♥だめえつ♥♥あや、さま……っ♥♥そんなつ、あんつ……♥♥あああつ♥♥そんなに入れたらっ……♥♥狂ってしまいます……っ♥♥」

「思う存分狂えっ……お前が達する顔を見てやろう……っ」

私の制止なんてあつてないようなものだ。綾様は遠慮なく私の中に肉棒を突き刺した。あまりの快感に体の力が入らない。人形のように綾様になすがままにされてしまう。

「やらあ……っ♥そんならに、されたら……っ♥ああんっ♥♥ひうっ♥♥ああっ、あやさまあっ……♥あやさまあ……だめええっ♥♥きもち良すぎて……っあたま、おかしくっ……なるうっ……♥」

突かれるたび私の身体が前後に揺れる。その度一番奥に亀頭が当たって、ムズムズした感覚が溢れた。中から何か溢れ出す感覚とともに結合部から液体のようなものが溢れ出す。

「琴音の、ここがびしょ濡れになっているな……っこんなに濡らして……っ悪い娘だ……っ」

「ひやうっ……♥♥は、んああっ♥♥ご、めんなさ……っ勝手に、でちゃうんです……っ♥♥」

「ああ……っ可愛らしいぞ……っ」

ぽちゅんっ♥♥ぽちゅんっ♥♥と部屋に水音が鳴り響く。中から液体がどどん溢れて、下に敷いた布団がぐしょぐしょに濡れてしまっていた。

奥が気持ちいいのに頭がおかしくなりそうで、気を保ってられない。声を出すことすら難しくなってきた、荒い息ばかりが溢れた。

「あっあっあっ♥♥あんっ♥♥ら、めっ、もうおかしくなるう……っ♥♥きもちいいっ……綾さまのっ……きもちいいの……っ♥♥」

「ふっ、すっかり表情が崩れているな……っでは、もう一度精気を入れてやろうっ」

びゅるるるるっ♥♥と奥で熱いものが噴き出た。

ぶぢゅっ♥♥びゅくっ♥♥ぼびゅるるっ♥♥びゅるるるるるっ♥♥びゅ~~~~♥♥びゅぼっ♥♥

「んああああっ……♥♥あ、ああっ……♥♥で、てる……また、いっばい……♥♥」

気持ちいいのが奥に注がれているのが分かる。張り詰めた肉棒とは別の何かが腹部を圧迫して、またお腹が膨らんでいく。人間の内部で育つ神の精気が注がれていく。

長い長い吐精を終えると、綾様が秘部から肉棒を引き抜いた。未だその硬さは衰えていない。先っぽから白い液体がとろとろと流れているのが見えた。

「ああ……まだ溢れるな。注ぎ足りないが……お前の中にある御霊が育つのを待たねば」

「あう……♡は、はあ……っあ、ああ……♡♡」

さつきと同じように膨らんだお腹がもごもごと蠢き始める。中で綾様の御霊が育っている。

「さあ、産むがいい」

お腹が熱い。中にあるものを出さないと……でも、出したらほんとうに頭がおかしくなってしまうかもしれない。でも、もつと気持ちよくなりたい。

「どうした、産まぬのか？」

「あ、綾さまあ……っ♡こわい、です……これいじょう気持ちよくなったら……ほんとに、変になってしまいそうで……♡」

今までこんなふうになったことは一度もない。こんなに気持ちよくなったことも。私の口からこんなに大きな声が出たことも。全部初めてだ。

綾様はそんな私にちゅつと口付けを落とすと汗ばんだ肌で抱きしめた。

「お前は今までたくさん辛い思いをしたのだろう。だからその分、たくさん気持ち良くなっているのだ。我がお前を幸せにしてやる」

その言葉に安心して、私は身体に力を入れた。中で育った御霊がお腹からどんどん降りてきているのを感じる。

「んあ……っ♥あ、あつ……♥♥ああああ……っ♥ダメエ……気持ちいいっ、気持ちいいのおっ……♥出ちやう……っあああああ~~~~~っ♥♥♥」

ぞくつと身体中に快感が走る。秘部から御霊が顔を覗かせ、徐々にその姿を現した。力を入れると中からぽんっ、と簡単に外に飛び出した。

けれど一瞬身体が楽になったのも束の間、また次の御霊が奥から降りてくる。

お腹がいつぱいいつぱいで苦しいのにどうしてこんなに気持ちいいんだろう。アソコが広がって、はしたないところを綾様に見られているのに、感じてしまう。

「っ……まったく、いやらしい花嫁の姿を見せつけられて興奮してしまったではないか」

綾様は興奮気味に言う、私の目の前で大きな肉棒を手で抜き始めた。ビンビ

ンに張り詰めた肉棒を握り上下にしごく、と亀頭の先っぽからびゅっ♥びゅっ♥と白い液体が噴き出る。そして視線は私の秘部を見つめていた。

「ああッ……琴音……出してくれ……っ私の御霊を産んでくれ……ッ」
手のひらからちゅぷちゅぷといやらしい音が鳴り響く。

——なんて……気持ち良さそうな顔。

その顔に触発されたのか、自分でも何を思ったのか、私は自分で自分の陰核に触れた。硬く濡れそぼった陰核に触れるとねっとりしたものが指に絡みつく。私が出した愛液なのか、それとも綾様が吐き出した精液なのか。それを指に纏わせ、ピント立ち上がった陰核になすりつけた。

くちゅ♡ちゅこっ♡ぬちゅっ♡

——ああっ……気持ちいい……♡

自分からこんなことをしてしまうなんてまるで痴女だ。破廉恥で、はしたない。でも、そんな私を見ている綾様の視線はひどく満足そうに笑っていた。

「あ、あうう……っ♡出ちやう……っ出ちやいます……っ！ 綾様の、御霊……また……っ産んじやう……っ♡」

収縮した秘肉を御霊が押し広げる。卑猥な音を立てながら私のアソコから次々と御霊が産まれていく。

気持ち良すぎてもう息ができない。脚が小刻みに震えて痙攣したみたいになっている。

「は、ひ……っ♡んああ……♡♡あ、や……さまあ……っ♡」

「うっ……、っ出すぞ……っ……」

肉棒をしごく手が一層早くなり、綺麗な顔に深いしわが刻まれると、肉棒の先から勢いよく白濁の液体が噴き出された。噴き出された綾様のどろどろの精液が私の身体の上に落ちてゆつくりと広がっていく。

———こんなにたくさん注がれていたなんて……♡♡